



## ③ 微萩 (ミソカハギ) という説

- ◇ 新井白石著『東雅』(1717年):「(和名抄に) 鼠尾草ミソハギといふ註せしは其花ハギに似て細密なるをいふなり、古語に密なるをばミソカといふなり。」
- ◇ 古典全集本『本草和名』の頭註に森沢園か(1807~1885):「美曾波岐・美曾萩に似る・美曾加之美曾は微小の類となす・胡枝花(ハギ)に似て小さい故の名なり」
- ◇ 大槻文彦著『大言海』(1935年):「みそはぎ・溝萩・微萩(ミソカハギ)ノ義、萩ニ似テ小ナリ、溝ハ当字」

## ◇ 日国大典・語源説(1)・紹介

## ④ 禊萩 (ミソキハギ・ミソギハギ) という説

- ◇ 山口幸充著『嘉良喜隨筆』(1750年頃):「ミソハギト云花ハ、ミソギ禊ニ用ルハギト云意也」

- ◇ 玉田永教著『年中故事』(1800年):「京大坂抜穂を以て先祖を祭る、是は僻事也伊勢似差へ9月16・17日の新嘗会に初めて新米を奉る、天子又しかり、左あれば憚るべき事也、土器或は蓮葉を用ひ、又は鼠尾草を用、是本朝の法にて神祭也、或日「みそはぎ」は御禊萩の略也とも。」

- ◇ 牧野日本植物図鑑:「和名ハみそはぎ即チ禊萩ノ略ト謂フ」

- ◇ 清水清著『植物の名前小辞典』(1978年):「禊萩(みそはぎ)の略という。盆の精霊祭のとき用いるといわれる。」

- ◇ 日国大典・語源説(2):ミソギ(禊)に用いるハギの意[嘉良喜隨筆]で紹介。

## ⑤ 三十日萩 (ミソカハギ) という説

- ◇ 伴信友著『動植名彙』(1827年):「コノ草ノ名義三十萩也近キ田舎人ノ云フガ方ニテハ三十日萩トイフカタリキ又花咲テ三十日ホドハ散ズアルモノ也」

## ⑥ 水添萩 (ミソハギ) という説

- ◇ 大石千引著『言元梯』(1830年):「鼠尾草・ミソハキ・水添萩・ミソハキ」

- ◇ 日国大典・語源説⑥・紹介

## ⑦ 獣尻尾萩 (ケモノシリヲハギ) という説

- ◇ 林麴臣著『日本語原学』(1931年):「鼠尾草みそはぎは 獣尻尾萩の義」

- ◇ 日国大典・語源説(4)・紹介

- ④・禊萩・ミソギハギ説・ミソキとミソギ両・○

- ⑤・三十日萩説・ミソ・アクセント・上平異・×  
・類聚名義抄・禊・ミソキ・上上○

- ⑥・水添萩説・ミソハギとの関係理解不可能・×  
・渠・ミソ・上上

- ⑦・獣尻尾萩説・ケモノシリヲハギの省略不・×  
・三十・ミソ・上平

※○×は和名類聚抄と類聚名義抄の記録による推理・判定によるもの。この時代の基準。

※ミソハギ説とミソキハギ・説が有力か。

ミソハギ・ミソギハギが最有力か。

◎ お盆の手向け草花としてミソハギの他に地方によっていろいろな種類がつかわれている。以下に、地方による種類の相同・相違を示す。

## ○ 民間伝承・第九巻・第三号よりの抜粋

秋田県毛馬内町:桔梗・女郎花・蓮華・その他(西洋花の派手なものは好まれない。)

山形県羽前羽黒山麓:桔梗(ボンバナ)・萩・薄・蓮華; 竹の筒・瓶・花瓶。

長野県小諸市:桔梗・萱・女郎花・水萩(山にとりにいく)。

長野県・南・北安曇郡:棚の両側に松・竹・萱・柏・棚に桔梗・女郎花・水萩を箒の形に束ねもので、お墓参りの度に水を注ぐ。

長野県東筑摩郡:野山にある桔梗・粟花・山百合・水かけ花(ミソハギ)

島根県簸川郡伊波野村:花立・盆花(ミソハギ)・ハナノキ(檜)

島根県能義郡安田村(明治三十七・八年頃):盆花として墓・仏壇にコゴメ花(オミナヘシ)・白コゴメ(ヲトコヘシ)・桔梗・ハナノキ(檜)・シブキ(柃)・シブキは年中の仏花・ミソハギも供える。

島根県日原町:盆花にソウハギ・桔梗・コゴメ花(桔梗とコゴメ花は野山へ取りに行く。)

山口県小野田市:盆花はソウハギと地方で云うミソハギを供える。

新潟:盆花ボンバナ(水萩)・蓮花・夏菊・百合・桔梗等

(注) 現在は盆花として、花屋がいろいろと、組み合わせたものを、販売・提供している。

## ◎ 日本植物方言集にないミソハギの別名

出典省略名:草は草木辞苑、下は下学集、説は節用集カサイヤナギ(河西柳):世

シュクコンソウ(宿根草):下・節

シュコングサ(シュコン草):草

## 3) 名称との関連事項

## ◎ 和名類聚抄と類聚名義抄の記録にみる各説の推理・判定

- ①・御簾萩転訛説・ミスハギの転訛・可能か・×

☆アクセントと清濁音とによる判定

- ②・溝萩説・ミソハギ説・ミソとミゾの差可・○

・和名類聚抄・美曾波岐・上上上平

- ③・微萩説・ミソカハギ説・ミソカの解釈不・×

・類聚名義抄・ミソハキ・上上○○

シュッコソウ (宿根草) : 下・節  
 シヨヒソウ (鼠尾草) : 色葉字類抄  
 センクツナ (千屈菜) :  
 ソウビサウ (鼠尾草) : 下  
 タマイハクサ (玉岩草) : 異名分類抄  
 タマイワクサ (玉岩草) : 現代名  
 タマノヤグサ (霊屋草) : 世  
 ホトケサマバナ (仏様花) : 草  
 ボンクサ (盆草) : 草  
 ミソケバナ : 三陸植物誌  
 ミソハキ : 三陸植物誌  
 ミゾハギ : 草  
 ミゾハギ : 草・言塵集  
 ミズカケクサ : 異名分類抄・草  
 ムラサキカウシ (紫高子) : 世  
 ラウビハクワ (狼尾杷花) : 世

#### 4) 語源に関する愚説

##### (1) 旧説

ミソハギの語源について数説ある。禊ぎ萩省略説・三十萩省略説・溝萩説などがある。最後の溝萩説は最も自然な見方によって、正しい解釈と考えている。(上記7説)だが、小生は次のような考え方もできるのではないかと思うので愚説を述べるとしよう。色々な角度から宛字して意味の判るように説明してみよう。

- ① 御衣葉木説：御衣は衣の敬語。御衣に似た葉の木ということではないか。葉の形が御衣に似ている。衣はソと読む。ソはアサと同じ。
- ② 御衣萩説：前説と同じように、これが萩の一種であるから名付けられたという説。
- ③ 御所葉木説・御所萩説：御所は神聖な所や高貴な場所・又霊場の意味で、そこに植えられる・葉木の意味。
- ④ 御所場葉木説：前説と同じように、御所・御所場は生育地を意味している。
- ⑤ 溝場木説：溝場は溝と同じような意味出在り、溝のある所に生える木という海とも解釈できる。溝萩説と同じ。
- ⑥ 三十葉木説・三十萩説：この三十は開花してから、萎んでしまうまでの日数を意味し、花の寿命が長いことを言ったものである。  
花に百日草あり、千日紅がある。それと命名が同じい。すこし、大げさのようであるが、意味は同じい。以上は、かつて、今から30数年ほど前に、推察・空想した愚説である。

##### (2) 新説

今また新たな愚説を思い出したのである。

鼠尾草・ミソハキ・ミソハギの名称の記録から、い

ろいろな推察ができる。

今ミソハギと呼ぶが、平安時代には、ミソハキと清音で呼んでいた。後世になってハキをハギ(萩)との関連で、ハギと呼ぶようになったらしい。(和名類聚抄・類聚名義抄)(ハギは万葉集に芽・芽子・波疑・波義とあり、ヤマハギのこと)

○ ミソハキと清音で呼ぶのが正しい。

① さて、ミソハキは、どういう意味の名称であろうか。

ここで、記録から、神話時代の古事記・日本書紀に溯って、見なければならぬと思う。

イザナギは筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原で、禊ぎ祓いの儀式をしている。

ここにアハキ・櫛という植物名が出ている。これと関係があると見るものである。

アハキの意味は、アヲキと関係があるという人もいる。

② このアハキは、ミソハキと関係があり、又ミソハキの古い名称と考えることができる。

③ アハキはアとハキと分け、ミソハキはミソとハキと分けるとハキが同一と考えられる。

○ そして、ミソハキの意味を極論すると、ミソ(ギ)・禊・ハキ・掃く=ハラヒ・祓の意味でなかったかと考える。ミソギ・ハラヒ・ハキ清めの具として利用されたのである。

和歌山県の方言にミソハキをミソギと呼ぶ地方がある。

#### 5) 参 考

『日本書紀』一書に曰く

「伊弉冉尊、火神を生みます時に、灼かれて神退去りましき、故れ紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗此の神の魂を祭るに、花ある時には、亦花を以て祭り、又鼓、吹、幡旗を用る歌ひ舞ひて祭る。」(岩波文庫本)・(死後の祭りの様子)

『俳諧歳時記菜草』・七月

「鼠尾草・みそはぎ・時珍日鼠尾草穂の形を以名に命す○韓保昇日鼠茎の端に夏四五穂を生ず、車前おほばこの如し、花赤白の種あり、

・水懸草・みつけぐさ・増山の井・説説あり、貞徳云水影草はおほく七夕によめり、水懸け草は稲の事なり、又或説にみそはぎ也、聖霊に水むくる心なり。」(あき)

・『毛吹草追加』(中)(正保四年・1647年)

玉祭 付施我鬼

みそ萩や野なから露の玉祭 未得

みそ萩にそふやせがきのはた薄 未得

『野々舎随筆』(大石千引著)

「○鼠にかまれたるに妙薬・毒蛇にかまれたるには、鼠尾